2023年度　研究旅行奨励制度　報告書

古平町・積丹町における例大祭の比較と特徴
－古平町恵比寿神社例大祭の事例を中心に－

25AR117　保田　美波
25AR118　松尾　燎成

目次

１．目的地
２．研究旅行の目的
３．期待される成果
４．研究旅行日程表
５．各神社の概要
６．古平・積丹地域に根付く例大祭について
７．例大祭の様子（天狗の登場まで、街の練り歩き、火くぐり、献酒の儀式）
８．例大祭観覧者、例大祭参加者へのインタビュー
９．古平町長　成田昭彦氏、積丹町農業委員会総括係長　成田守寿氏へのインタビュー
１０.最後に

１．目的地

日本　北海道　古平郡古平町・積丹郡積丹町

２．研究旅行の目的

生身の人間が燃えた後の灰の上を渡る火渡り神事は全国各地で見ることができるが、天狗の格好をした猿田彦が3m を超える大きさの炎の中に飛びこむ独特な形態の火渡り神事があるのは古平町と積丹町だけである。

① その希少さと、観衆と共に火渡りを見届ける緊張感や、炎の温度、体の中にまで鳴り響く太鼓の音を現地で感じること。
② 大炎の中で危険を冒して火渡りを行う必要性、および火渡りの危険性を超越した、祭のもたらす熱狂的な雰囲気を体感し、町民と同じ目線で理解すること。
③ コロナ禍を乗り越えた今年の開催へかける思いを、自分たちが祭りに参加することによって言語化し、98年の歴史の中の現在の状態を記録し、成果報告書としてまとめること。
④ 記録を行うにあたり、現地の方、祭り関係者、観覧者それぞれが持つ祭りへの想いを聞くこと。
⑤ 人口減少と高齢化が進む中で、これほど大掛かりで危険な祭は人手が必要かつ準備期間もかかることが予想され、その担い手となる高齢者にしわ寄せが起こっていること。

等が考えられる。そのような中で実際に準備期間に町の何人が準備に関わり、人口減少と高齢化による問題点とその対策等を聞き取りし、実際にこの目で確かめ、祭りの苦労を知ることが目的である。また今回は、開催時期の関係上、古平町恵比須神社例大祭の開催者・参加者への聞き取り調査を中心に分析を行った。

３．期待される成果

① 古平町に根付いた独特な火渡り神事に対して町民が持つ想い、天狗の火渡りをもって大漁や安全を祈願する理由や必要性を知ることができる。

② 1919年火事により資料が消失し、天狗の火渡り神事に関する情報が少ないため、2023年現在の祭参加者人数や、裏方の準備の内容、運営における町の祭りの課題や対策、祭りの様子をまとめる。

③ 遠く離れた九州から来た大学生が丸2日間滞在し、町のリアルな祭りの調査結果をまとめ、資料として作成することに意義がある。

④ 臨場感、 特に観衆が感じる炎の熱さや見ている人たちの表情など、現地の雰囲気の中でしか得られない情報を活字にし、そのままの温度で他者に共有できる。

⑤ 祭りによって気持ちの高揚した町民に、リアルタイムで聞き取りして得られる回答こそが、インターネットや書籍では得ることのできない、研究旅行に行く意味のある成果であると考える。

机上で数年間学んできた全国各地に存在する人口減少と高齢化の問題が同時進行する中で祭事を行う難しさを体感することができる。研修旅行だからこそ、2日間かけて町に密着し気持ちを現地の方々と近づけたうえで祭りに臨める。祭りを最初から最後まで体感して、祭りの熱気が伝わるような研究旅行実施レポートをまとめることで、祭りの意義、古平町の実態を西南大学関係者に伝えられる。観覧者が古平町に関心を持つきっかけを作ることができ、祭りの伝統的な魅力を伝えられるようになる。そうすることで、祭りを少しでも多くの方に知ってもらうことにつながり、受け継がれるきっかけになる。また、若者の祭り離れが深刻化しているため、同じ若者である私たちが魅力を伝えることは説得力があり、私たちの活動そのものが大きな意義を持つと考えている。

４．研究旅行日程表

出発予定日 2023年9月8日 帰着予定日 2023年9月11日	旅行予定日数 4日間	
	滞在地	行動・調査内容
第1日目	福岡→北海道・小樽	〈移動日〉

第2日目	小樽→古平郡古平町新地町琴平神社 積丹郡積丹町美国町美国神社 古平郡古平町浜町古平町役場かなえーる図書館 積丹町総合文化センター 古平町浜町恵比須神社	・琴平神社、美国神社の撮影 ・図書館での古平町史観覧 ・積丹町役場での積丹町農業委員会総括係長成田守寿氏へインタビュー ・町の練り歩き、町民と祭り観覧者へのインタビュー、火くぐり観覧
第3日目	古平郡古平町役場→札幌	・古平町長　成田昭彦氏へのインタビュー、献酒の儀式見学、古平町関係者と祭り運営にかかわる町の方にインタビュー
第4日目	札幌→福岡	〈移動日〉

５．各神社の概要

左の地図は北海道西部に位置する古平・積丹地域の
ものである。天狗の火渡り神事が行われる３つの神社の位置関係は左の通りである。古平の恵比須神社から積丹の美国神社までの道のりは約7kmで、車でおよそ10分ほどの距離感である。

琴平神社

・祭神…大物主神（おおものぬしのかみ）、八重事代主神（やえことしろぬしのかみ）、保食神（うけもちのかみ）、崇徳天皇（すとくてんのう）

・詳細…明治8年、郷社に列せられ、古平郡の鎮守となる。
昭和24年、古平町西部大火に遭い、御神体を除き全てを焼失し、浜町恵比須神社に併祀した。

恵比須神社

・祭神…事代主神（ことしろぬしのかみ）

・詳細…弘化4年（1847）、浜町遺跡の丘に恵比須神社を創建。
明治29年、恵比須神社を郷社琴平神社の西宮とするため社殿を改築した。
大正14年、浜町1117番地の三山神社を合祀の際、神輿を始め祭具も譲られ、その後例祭時に神輿渡御が行われるようになった。

美国神社

・祭神…保食神（うけもちのかみ）、大綿津見神（おおわたつみのかみ）、大山祇神（おおやまつみのかみ）

・詳細…享保10年（1725）京都伏見稲荷大社の御分霊を奉斎し、稲荷神社と称したことに始まる。
明治8年郷社に列す。
明治26年5月25日に稲荷神社を美国神社に改称。

※各神社の概要は北海道神社庁公式ホームページより引用
https://hokkaidojinjacho.jp/

各神社の印象としては、滞在時間が琴平神社と美国神社は少なかったため詳しいことは述べられないが、町同様に人の気配がなく、とても大炎を用いた荒々しい祭りが行われるような神社には見えなかった。しかし、写真に見られるように立派な鳥居が立ち、手入れが隅々まで行き届いているようで、決して粗末な神社ではなかった。琴平神社では我々以外にも1人参拝される方がいた。また、美国神社では格好は装束ではなかったが、掃除されている方がいた。美国神社では御朱印の存在も確認することができた。

６.古平・積丹に根付く例大祭について

天狗の火渡り神事（※現地では「天狗の火くぐり」とも呼ばれる）は古平・積丹地域の主に３つの神社に根付いた例大祭の中で行われる伝統的な儀式である。祭りに登場する天狗は猿田彦大神であり、日本神話における天孫降臨の際に、天照大神の命を受けた瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）を高千穂へ導いた神とされている。道を切り拓く神であり、この土地の五穀豊穣や大漁祈願のため、火くぐりには猿田彦（天狗）が登場するのである。

日程としては、7月の第2土・日曜日に古平町新地町の琴平神社で、9月の第2土・日曜日に古平町浜町の恵比須神社で、7月4日・5日・6日に積丹町美国町の美国神社で催される。

これらの例大祭の火くぐりの起源がいつなのか詳細な情報は残されていない。というのも昭和24年に古平町で起きた大火によって消失してしまった資料も多いからである。「古平町史」には琴平神社において、“明治十三年、氏子の寄付により神輿の新調し、祭典の渡御に使用するようになった。”という記述があることから、火渡り神事が行われるようになったのはそれ以後のことではないかと推測できる。

また、北海道神社庁公式ホームページでは、恵比須神社は大正14年に神輿を始めとする祭具が譲られたということから、ここからも大正14年以降である推測ができる。祭の目的は海上の安全や災厄のお祓い、大漁や五穀豊穣を祈願することである。

それぞれの神社で祀られる神様を宿した神輿を天狗の姿をした猿田彦が先導し、町を練り歩きながら災厄を祓っていくのである。そして境内に入り、カンナ屑を燃やした大炎の中を猿田彦（天狗）や獅子舞、神輿などがくぐっていくのである。

７.例大祭の様子

・天狗の登場まで

9月9日恵比須神社例大祭当日、午後15時頃の古平浜町の様子は街の人通りはまばらで少ない。港町ならではの静かな波の音が聞こえてくる。しかし、街の至る所に貼り出された天狗の姿を描いたポスターや、数件の出店、時折聞こえてくる太鼓や笛の音が、今日この場所で祭りが行われるという実感を湧き立たせていた。神社の境内には、火くぐりの最高の瞬間をレンズに収めるべく、カメラマンたちが場所取りに力を注いでいた。天狗が神社に到着するのは20時頃の予定だが、カメラマンたちの場所取りは朝から行われていた。 17時頃になると天狗が控える家の前に町民が集まり始めていた。町民は皆楽しそうに談笑している。車で家を行き来する人や、旗を持った子供たち、家を出入りする神主や袴を着た祭り関係者など、天狗の登場に向かって現場の状況は徐々に慌しさを増していった。獅子舞が観衆の前で軽く舞を見せる場面もあった。暗くなるにつれ緊張感は増していき、今か今かと天狗の登場を待ちわびる町民が見守っていた。18:45頃、日も落ち切った古平の街にようやく天狗が家の玄関から姿を現した。 観衆は天狗の迫力に圧倒されながら、「おおお！！」と感嘆の声をあげていた。

（天狗の登場を待ちわびる人　撮影者　松尾）

（町の子供たちが準備する様子　撮影者　松尾）

・街の練り歩き

観衆の前に登場しても、すぐに街の練り歩きは始まらなかった。天狗の姿お披露目といったような時間だろうか、10センチ以上の高さはある一本歯の高下駄を履き、縁起の良い紅白の装束を纏い、災厄を断ち切るとされる矛や刀を身につけていた。歩みをサポートする役割の3人の男が天狗を囲んでいて、道の真ん中に置かれた椅子に腰掛けた天狗は歩き出すタイミングを見計らっていた。観衆の見守る緊張感の中、天狗はすっと立ち上がり、街を歩き出した。堂々と腕を大きく横に振り、広袖はひらひらと揺れていて、とても優美であった。大股で歩き、一本歯の下駄の足音は「カツッ、コツッ」とテンポよく耳に刻まれた。後列には、山車や荷台に和太鼓を乗せ、装飾されたトラックが続いた。それらを囲んで天狗を追うように観衆は付いて来ていた。神社の方向へと歩いていくのではなく、住宅街をゆっくりと穢れを見落とさないように歩いているようだった。歩く天狗の前を遮ったり、横切ったりするのは無礼な行為で、また洗濯物を外に干したままにすることも穢れと見なされるためご法度である。もしそのような状況に出くわした場合は、天狗は歩みを止め、持っている杖でその方向を指し示す。天狗は椅子に腰掛け休憩を途中に挟みながら歩いており、座っているタイミングでは観衆との記念撮影などが行われる。幼い子供は天狗の睨みの迫力に泣き出してしまう。この時間だけは天狗の前に立つことも許されているようだった。

（撮影の様子　撮影者　松尾）

（天狗の姿　撮影者　松尾）

・火くぐり

　時刻は20時を過ぎた頃、神社に面する通りの方から賑やかな太鼓と管楽器の音が段々と近づいてくるのがわかった。天狗を先頭とした山車と人々の群れが小さな神社の境内に向かって歩いてくるのは異様な光景であった。天狗は本殿向かって正面の境内の真ん中に腰掛け、 場が整うのを静かに見守っていた。目の前には大量のカンナ屑を詰め込んだ袋が10個以上は積み重ねられている。火を操る男たちがカンナ屑を境内の真ん中に軽く積み上げ、ついに火がつけられた。最初は軽いキャンプファイヤーのような小さなものだった。天狗は立ち上がり、火の周りを練り歩き、様子を睨むように伺っている。火はやがて炎となり、火を操る男たちも慌ただしくなり、天狗の通り道を軽く開けるようにしてカンナ屑の山を積み上げた。和太鼓と笛の音が身体中に響き渡り、鼓動と太鼓の音の境目が曖昧になってきた。カメラを構える人、目に焼き付ける人、老若男女、赤子に至るまで一言も発することなく、その瞬間を目撃するべく固唾を飲んで天狗の一挙手一投足を目で追っていた。炎が2メートルを超える大炎となる頃、睨みを効かせた天狗は決心し、道を切り拓くように袖を大きく横に振りながら炎の中を潜り抜けていった。その瞬間観衆の拍手と感嘆の声が聞こえてきた。しかし、緊張は解けることなく、この火くぐりは3度も行われた。火をくぐるのは天狗だけではなく獅子舞もくぐっていた。天狗同様睨みを効かせ、炎の周りで優雅に舞っている。そしてタイミングを見計らい大炎の中をくぐり抜けていった。 火渡り神事が終わるとその日の祭りも終わりになるのだが、人々の帰る足は非常に早く、ついさっきまで荒々しい炎の祭りが行われた境内の中はすっかり閑散としていた。これもまた異様な光景であった。

（天狗の火渡りの様子　撮影者　松尾）

・献酒の儀

翌日の朝8時頃、恵比須神社の通りの斜め向かいに位置する古平町役場の駐車場で人々が集まっていた。役場の前には長いテーブルが置かれ、天狗に献上される御神酒が置かれていた。この日も前日同様、太鼓と笛の音が街に鳴り響いていて、山車も3台ほど集まっていた。この日の天狗は観衆をそれほど待たせることなく、どこからともなく姿を現した。献酒の儀は突如始まり、天狗は広い駐車場を存分に使いながら献上される御神酒の前を練り歩いていた。御神酒を献上する役は古平町長である。天狗が御神酒を受け取る前に獅子舞が匂いを嗅いで毒味役を受け負っているようだった。そして、御神酒は天狗に手渡され献酒の儀は終わった。その後、神輿を担いだ男たちの舞や、子供たちによるソーラン節の踊りの披露もあり、祭りは終始盛り上がりを見せていた。

（献酒の儀式　撮影者　松尾）

（献酒後　神輿の舞　撮影者　松尾）

８. 例大祭観覧者へのインタビュー

〈インタビューの意図〉

今回の研究旅行の記録を行うにあたり、現地の方、祭り関係者、観覧者それぞれが持つ祭りへの想いを把握、比較することを目的として聞き取りを中心に調査を行った。祭りによって気持ちの高揚した町民にリアルタイムで聞き取りして得られた回答こそが、インターネットや書籍では得られない、現地で取材する意味のある成果であると考える。観光を目的とした古平町出身ではない観覧者と古平町で生まれ育った観覧者、祭りを運営する立場、祭りに参加する立場の方々にそれぞれ聞き取り調査を行い、祭りに対する思いを比較する。

（観覧者　札幌市在住　50代女性）
Q.この例大祭をどうやって知ったのか？
A.インターネットで天狗の火くぐりの様子を写した画像をたまたま見たことがきっかけ。

（観覧者　札幌市在住　60代女性）
Q.例大祭を観覧しに来た目的は？
A.天狗の火くぐりの様子を写真に収めるため。
Q 例大祭を見に来た回数は？
A.3回目。
Q 何度も訪れたくなる理由は？
A.火を越える瞬間の興奮はこの例大祭でしか味わえないから。
Q.3回見に来た中で、例大祭に変化はあったか？
A.雰囲気が変わった。本来は町役場から火くぐりが行われる沿道に出店がたくさん出て、夏祭りのようなにぎやかな感じだったが、今回は出店が3つほど役場から少し離れた広場に出ているだけ。

（観覧者　古平町在住　70代女性）
Q.古平町では昔から町民の方々は毎年例大祭を楽しみにしているか？
A.小さいころから毎年楽しみにしている。コロナで開催できなかった分今年は盛大に行うと聞いた。
Q.皆さんにとって例大祭はどのような存在か？
A.古平の宝であり、財産である。守り、未来に受け継ぎたい。
Q.高齢化が進む中で例大祭の存続は難しくなってきているのか？
A.春（琴平神社）に行われる例大祭に関しては、小樽や札幌からたくさんの人が御神輿を担ぎに来る。50人ほど集まらなければ、御神輿を担げない。

（観覧者　余市在住　元小学校長　男性）
Q.あなたにとってお祭りの存在とは何か？
A.一つのことを町民全体で盛り上げることで、町民の心が一つになることに大きな意味がある。また、先人に思いを馳せることは普段ないが、祭りを通して古平の開拓や街を支えてくれた人々を想うきっかけとなり、歴史を噛み締めることにも繋がる。そして、古平の子供たち全員が将来働けるキャパがこの街にはないため、大人になると街を出ていく人も多いが、お祭りをきっかけに里帰りしてくれる。
Q.過疎化による祭りの規模の縮小などが懸念されるが、それについて何か対策はあるか？
A.子供が増えないと街の人口は絶対増えないため、子育てしやすい街づくりを目指したい。具体的には子供の教育に補助が出るなど、子育て支援が重要な鍵を握っている。

Q.積丹の美国神社例大祭との違いはあるか？

A.観に行ったことがないので分からない。しかし、将来性を考えると街の規模も似ていて、一つの地域になる可能性もゼロではないと考えている。そのため交流を増やしていく必要がある。

Q.お祭りはずっと残ってほしいと思うか？

A.古平町が存続する限りはずっと続けていきたい。しかし、人口が減って担い手がいるかどうかは疑わしい。

Q.古平にルーツを持たない人が祭りに参加したいという場合はどのように対応するか？

A.札幌にある大谷大学では故郷や郷土をテーマにした講義が行われていて、既に大谷大学の教授が学生を連れて実際にお祭りに参加している。そのため、地元民に強く拘るのではなく、同じ気持ちをもった人たちであれば歓迎する。

（獅子舞役　古平町在住　10代男性）

Q.今回はどのような役割で例大祭に参加するのか？

A.獅子舞役として火くぐりに参加する。

Q.どのような経緯で獅子舞役を演じることになったのか？

A.獅子舞をやりたい人が自分たちだった。（立候補制のような堅い雰囲気ではない）4人が二組に分かれて二日間獅子舞役をする。

Q.火くぐりを行う際の安全対策などがあるか？

A.火をくぐる前に水をかかる。

Q,なぜ獅子舞役をやりたいと思ったのか？

A.子供のころから見ていてかっこいいと思ったから。お父さんが御神輿を担いでいて、小さいころから例大祭にかかわる大人を見てかっこいいと思ったから。

Q.天狗役についてどういう印象を持っているか？

A.勇気があってかっこいいと思う。

（祭り関係者　積丹町在住　60代女性）

Q.美国神社例大祭、琴平神社例大祭、恵比須神社例大祭を比べて何か違いはあるか？

A.それぞれ春、夏、秋祭りと呼んでいて、恵比須神社で行われる秋祭りは農作物の豊穣を願う意味合いが強い。そして、琴平神社で行われる夏祭りは漁業に関する祈願や感謝の意味合いが強いと聞いたことがある。

Q.古平と美国（積丹）で行われる祭りに違いはあるか？

A.まず規模が古平の方が大きい。美国のお祭りの1日目は山車が神社に集まるだけで終わってしまう。2日目は天狗が街を練り歩いたり、山車や神輿が海上渡御を行ったりする。しかし、街の規模が小さいためすぐ終わってしまう。そして、美国の天狗の方が古平の天狗よりも位が高いというのも特徴的。

〈回答内容の考察〉

6名の方々がインタビューに協力してくださった。観覧者の出身地で回答を比較するとやはり古平出身の方は祭りを宝のように考え、受け継ぐべきだという熱い思いが伝わってきた。特に高齢者は小さい頃から祭りとともに過ごしてきた中で、祭りに対する愛着が回答中の笑顔や積極的な姿勢から伝わってきた。一方古平町外からの観覧者は淡々とインタビューに回答する姿勢が印象的で、祭りを見に来た目的としても、祭りの項目の中でも火くぐりのみを中心に観覧しに来ており、古平町民は祭りに対する熱い思いがあることがインタビューを通して分かった。

また、高齢化と人口減少に伴う祭り存続に関しての懸念と対策に関して、古平出身の70代女性と元小学校長の男性の回答を比較すると、祭りの時期だけ町外からの担い手の存在に頼っている点に関して問題ないと考えている回答と、根本的な解決策として町の子供の人口を増やすことを第一に挙げる回答は教育業界を経験してきた立場の違いに起因する考えの違いが見えて興味深い。

獅子舞役の古平町在住１０代男性のインタビューからは、祭りに対する若者の関心度が高いことを初めて気づかされる機会となった。研究旅行で直接町民の声を聴く前は祭りに関する資料の少なさから獅子舞が火くぐりをすることすら知りえなかった。さらに祭りの担い手は昔から古平町に住む高齢者だと予想していたが、祭りの目玉ともいえる火くぐりに現役高校生が参加していたことは予想外だった。インタビューからは獅子舞や天狗の存在をかっこいいと感じる祭りを通して古平町民が持つ感性が若者にも脈々と受け継がれていることが分かった。

最後に、祭り関係者である積丹町在住女性の回答に関して、積丹町民であるにもかかわらず古平町の祭りの運営に関わっており、例大祭は住む地域関係なく祭りを支えたいという思いを持つ人同士をつなぐ存在になっていることも伺えた。

９．古平町長　成田昭彦氏、積丹町農業委員会総括係長　成田守寿氏へのインタビュー

〈インタビューの意図〉

お二方とも町に関わるお仕事をされていて、且つ同様のお祭りが存在する古平町・積丹町からの視点の違いや共通点を探ることである。

なお、積丹町の成田係長さんには、十分に時間かけてインタビューをさせて頂けたが、成田古平町長さんには、献酒の儀式直前であったため、短い時間のインタビューであったことを申し添えておく。

(北海道古平郡古平町長　成田昭彦氏)

Q.あなたにとって例大祭とは ？

A.小さな頃から生活してきて70年間毎年の大イベント。親しみを感じるイベントであり、古平町になくてはならないものだと考えている。死ぬまで一生続け、守りたい。

Q.今後の存続に向けてどのような考えを持っているか？

A.子供世代に伝承していくべきだと考えている。自分たちが大切に思っている町に人がやってきたり、一度町から出て行った町民が祭りをきっかけに町に一時的に集合したりする機会でもある。無形文化財に登録して例大祭を保護するべきだと考えている。

Q.美国神社で開催される例大祭との違いは？

A.漁を行っていた漁師が伝承していった。例大祭の担い手と、伝承の担い手が同じ。 規模が恵比須神社のほうが大きい。

Q.町長が体験してきた例大祭の中で昔と今の具体的な変化は？

A.中学生の頃などは部活動ごとに参加をしていたが、現在は子供会一つで、子供の人数が少なく、活気も以前よりはない。

Q.町の担い手高齢化が進む中で対策を打っているか？

A.担い手は高齢化とともに年々減少している。担い手がもしいなくなったら、町にルーツがある人を呼んで存続することを考えている。例大祭を存続させたいからと言って、全くルーツのない人間を集めて無理やり存続させるのでは意味がない。

(積丹町農業委員会総括長　成田守寿氏)

Q.元々の例大祭の成り立ちは？

A.春から夏の終わりにかけて盛んにニシン漁が行われていた。アイヌ語で"シャック=夏 コタン=場所"が由来となり地名が積丹になった。

Q.積丹町と古平町の例大祭での違いやそれぞれの由来は存在するのか？

A.天狗が先導役として交差点を四方に睨み、街に不浄がないか確認する。天狗は過敏に反応するのが特徴。例として、洗濯物を干しっぱなしであることや天狗より頭の高い2階の家から見物している人を見つけると見下すな！と意見する。見せ場としてあえてその一連の流れを行う場合もある。天狗が怒った時は太鼓が鳴ったり、練り歩く時にかかっていた音楽が止まったりする。

Q.積丹の火祭りはいつから行われていたか？

A.分からない。慣習的側面が強く、資料が作られていなかった。

Q.担い手の高齢化による祭りの存続の難易度は上がっているのか？

A.存続は怪しい。40年前は小学生が250人ほどいたが、現在は60人。子供も少ないのはもちろんだが、大人も少ない。漁師が多いが、魚も取れないので、小樽や札幌へ人口が流出しているという現状がある。祭りの時期だけ参加する人もいるが、満足いく人数ではない。当日だけ参加する大人は30～40名ほどいる。具体的な対策は打てていない。 お神輿3基、山車が2台あり、町内で運営している。町民が準備として行う飾り付けや雑草処理などにかかる費用は個人が負担している。見物客は年々増えており、現在は約900人が訪れる。

Q.多くの見物客が訪れることで、街が潤うことはあるか？

A.お店がまず少なく、お店にお金を落としてくれるわけではない。コロナ明けで国内各地から

の見物客が多いが、ウニは8月いっぱいで漁が終了するなど、お金を落とす場所が作れていない。狭い街だからこそ、飲食店を新規で作ることが難しい。(街の受け入れが難しい)

Q.例大祭に対して街の皆さんはどのような感情を抱いているのか？

A.割合で答えると、すごく楽しみにしている人が6割、もう疲れてしまった人が4割ほどだと感じる。高齢化によるやむおえないものや、町外からやってきて、小さい頃から例大祭の存在を知らない人などは4割に属している印象。ずっと街に小さな頃から住んでいる人は、準備期間が始まるだけで浮き足立つ。街全体で盛り上がってという感じではない

Q.例大祭期間中の町民の様子は？

A.家で豪華なご飯(お酒や煮物)を食べたり、周りの家に配ったりする。

Q.コロナが明けてから久しぶりの開催で、街の雰囲気はどのような感じか？

A.コロナ明けだからと言って特別盛り上がっているというわけではない。子供が少ないので子供が街を練り歩く行列が短いが、人数が多く、列が長い方が盛り上がる。 昔は子供も参加してお金がもらえていたし、持ち手が多くて旗の取り合いになっていた。

Q.なぜ危険を冒してまで大火の中火くぐりを行う理由は？

A.街を練り歩いて回収した不浄を天狗もろとも火で浄化、清めるという意味合い。 今まで怪我人や死者は聞いたことがない。安全のために、怪我をしたらすぐわかるような白装束、軍手の着用、下着の代わりにサラシを巻くなどの対応を行なっている。

Q.例大祭での目玉である火渡りの炎を高くする工夫や技術はあるのか？

A.建設会社が貯めておいたカンナ屑を無料で引き取っている。大量のカンナ屑はすぐ引火しやすく、炎の大きさやカンナ屑が宙に舞う様子も見ることができる。(地域の企業との連携)火くぐりに儀礼的な格式は特にはないが、やはり火くぐりをするとかっこいいという心理的印象が町民にはある。

Q.この例大祭を未来に残していきたいと思うか？

A.個人的には残したい。しかし、例大祭は、地域に人がいてこそ成り立つため、保存会を作ってまで"存続"だけにこだわる必要性があるかどうかは議論が必要だと考えている。無くなるかどうかはその時になってから決める。例えば、ニシン会というソーラン節の保存会はさまざまな地域に存在しているが、うまく行っているわけではない。大元はニシン漁があってこそであったのに、ニシンが取れなくなって50～60年ほど経つので、ソーラン節の振り付けであるニシン漁の工程の本物を見たことがある人がいない状態。つまりリアルな意義のあるものになっていない。実際に近い形でやるべきで、その実際の漁が楽しいと思い、それを残したいと思っている状態で存続すべき。現在は行為自体に価値が出ている状態。 漁村の夏祭りは来作の豊漁祈願、秋祭りは豊漁に感謝をするという本来の目的を持っているが、目的が薄くなっているのが現在。海水温の上昇により、鰤やマグロなどが現在は漁のメインとなっている。環境の変化が祭りや文化に影響を出している。

〈古平町長、成田氏のインタビューを通して〉

お二方の回答に共通していたのは、町に関わる仕事をしていらっしゃるため、祭りだけというよりは、町の抱える問題と照らし合わせながら回答していただけた印象である。お二方とも

に、自らの故郷に対する愛があるからこそ、祭りが存続していくのは“町ありき”という考え方であった。無理に部外者を引き入れて祭りの存続をするのは、祭りはもちろん、町のためにもならないという考え方である。

祭りを観たり、話を伺って考えたことは、“祭りの存続”よりも先に、“町に対してのアプローチ”を考えるほうが祭りの存続に良い影響を与えると考えられる。特に子育て支援の充実や、子育てのしやすい環境作りを目指し、町の将来の人口を増やしていく取り組みが最重要である。

町にルーツを持つこと、祭りに関心を持って育つことで、仮に将来、町を離れてしまっても祭りの時に戻って来てくれさえすれば、祭りの存続は確かなものになると確信した。

１０．終わりに

火渡りの炎の大きさは2メートルほどで、温度感は離れていたため伝わりにくかったが、町民や、観覧者の熱気は大いに感じることができた。 町民と同じ熱量で祭りを観覧するという点において、もちろん迫力がある点で私たちの胸も躍ったが、同じ熱量というのは、少ない日程での滞在の私たちには軽々しく口にはできないような町民の持つ郷土愛を感じた。その発見は実際に行って観覧してこその感想である。 担い手の高齢化については、実際、御神輿を担ぐことをまず高齢者ができないこと、そして町を出て行った人も祭りの時期だけ帰町することなどから緊急なほどの逼迫はなかった。火渡りの際に炎の中に飛び込む行為はやはり危険だが、町と祭りの伝統行事であり、しかるべき対策を取っていることや、慣れにより危険さを見ていて感じることはなかった。 準備期間や祭りに関わる人数に関しては、町役場の方々も把握していなかったが、町を美化する草刈りや飾り付けは個人宅がそれぞれで行っていた。実際に人口は減少しているが、祭りに関しては古平町にルーツを持つ人が戻ってきたり、札幌の大谷大学の学生などが祭りに参加していたりすることから、深刻な祭りの担い手不足は発生していないようだった。しかし、実際に人口減少が徐々に進行している事実は存在しているため、まだ祭りが円滑に進行できている今のうちから、保存会を作るなど考えを行動に移して行くことが祭りの存在を保護して未来につなげることにつながると感じた。例大祭の本来の意味合いとして、ニシン漁の豊漁への感謝と来季の豊漁、海上作業の安全祈願が上げられる。積丹町農業委員会総括長　成田守寿氏のインタビューを通して、ニシン漁が50～60年盛んに行われなくなった今、例大祭の本来の意味合いを体現することを意識したものであり続 けることは簡単なことではないのだと考えさせられた。これらの例大祭は地域のアイデンティティであり、大漁祈願や五穀豊穣という本来の目的よりも町の人々に活力を与える役割の方が大きいと肌で感じられた。特徴として古平町・積丹町地域に住む人々の大半はこの町で育った人がほとんどである。そのため物心つく頃からお祭りとの触れ合い続けており、共に成長していくのだろう。小さな町だからこそ、都会では薄れてきたご近所さんや町民どうしの繋がりが深い傾向にあることが見受けられた。閑散として人の気配の少ない町であるとばかり思っていたが、祭りが始まるにつれて人が増えだし、町民同士が楽しそうにコミュニティの境を越えて話していたのは驚きであった。全員が家族と言っても過言ではない印象であった。町民同士の繋がりの深さを感じたため

に、外部の人間である我々はインタビューするにあたり、そのコミュニティに踏み込むことをしばし憚られる程に結束の強さを感じた。古平町のコミュニティに属する人数の少なさや町に存在する商店の少なさは自分たちの生活する福岡市とは何もかも違ったが、私たちが地元に帰ると、言いようもなく温かさを感じたり、育ってきた地域のことを好きだと考えたりする感覚の相似さを町民の表情から感じることができた。

2日間という短い滞在期間ではあったが、対私たちではなく、対町民同士の結束力の強さを目の当たりにし、古平町を出ても祭りも期間は帰ってこようと考える人々の気持ちか少しわかったような気がした。火を求め、海に思いを馳せた熱い漁師街で育った人間たちで行われるこの祭りは、町民の繋がりの深さや、町への愛の大きさから伝わってくるものから、人口減少や高齢化の問題で簡単に無くなるようなものではなさそうだと思った。というより町の人たちに教えていただいた、というほうが適切かもしれない。そのような諸問題云々の前に、今を、この町で生きることの楽しさや喜びを最重要に考え、祭りを通して再確認しているように感じられたことが、今回の研修での最も大きな成果である。

＜参考文献＞

古平町史　第一巻　編集　古平町史編纂委員会　発行　古平役場
古平町史　第三巻　編集　古平町史編纂委員会　発行　古平役場